

慢性血栓塞栓性肺高血圧症に対する肺動脈バルーン形成術後の 運動耐容能改善に寄与する因子の検討

慢性血栓塞栓性肺高血圧症（CTEPH）に対する肺動脈バルーン形成術（BPA）の症状、運動耐容能、血行動態への有効性は近年複数の研究で報告されていますが、特にどのような患者群において BPA による運動耐容能の改善を見込めるか、その臨床的特徴は明らかではありませんでした。

今回、2012 年 11 月から 2018 年 4 月までの間に慶應義塾大学病院にて BPA を施行された患者 126 名を後ろ向きに解析した結果、CTEPH 患者において BPA による 6 分間歩行距離の改善を予測する因子として、年齢、身長、肺活量、BPA 施行前の 6 分間歩行距離、平均肺動脈圧が有用であることが分かりました。

最近の研究で、肺動脈血栓内膜摘除術または BPA による肺血管へのインターベンションは、酸素運搬を改善させるものの骨格筋での酸素取り込みには関与しないことが報告されており、運動耐容能の更なる改善にはリハビリテーションが必要です。CTEPH に対するリハビリテーションの有効性を示す報告は複数ありますが、今回の研究により、BPA による運動耐容能の改善を最大化するためには治療開始前の身体活動度や疾患重症度を評価し、特にどのような患者でリハビリテーションの必要性が高いかを検討する必要があると考えられました。

本成果は、2023 年 2 月 1 日に国際学術雑誌の『Journal of the American Heart Association(JAHA)』電子版に掲載されました。

論文

タイトル : Predictors of Improvement in Exercise Tolerance After Balloon Pulmonary Angioplasty for Chronic Thromboembolic Pulmonary Hypertension

タイトル和文 : 慢性血栓塞栓性肺高血圧症に対する肺動脈バルーン形成術後の運動耐容能改善に寄与する因子

著者名 : 醍醐恭平¹、勝俣良紀²、江寄康将、岩澤佑治¹、市原元気¹、三浦光太郎¹、佐藤泰憲³、佐藤和毅²、福田恵一¹

1) 慶應義塾大学病院循環器内科、2) 慶應義塾大学病院スポーツ医学総合センター、3) 慶應義塾大学病院臨床研究推進センター

掲載誌 : Journal of the American Heart Association(JAHA) (電子版)

DOI : 10.1161/JAHA.122.027395.

慢性血栓性肺高血圧症に対する肺動脈バルーン形成術後の
運動耐容能改善に寄与する因子

年齢



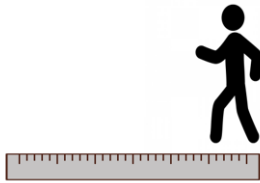
身長



肺活量



6分間歩行距離 (BPA施行前)



平均肺動脈圧

